

詩篇 131 篇

都上りの歌。ダビデによる

- 1 主よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。
- 2 まことに私は、自分のたましいを和らげ、静めました。乳離れした子が母親の前にいるように、私のたましいは乳離れした子のように私の前におります。
- 3 イスラエルよ。今よりとこしえまで主を待て。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

詩篇集の中でも最も短い詩の一つ。117 篇は 2 節まで、131 篇、133 篇、134 篇はともに 3 節までです。このかわいらしい詩に込められた真珠のようなメッセージを聞き取りましょう。

1 節

「誇らず」「高ぶらず」という詩人の心のへりくだりをもって始まる本篇は、彼の信仰の成熟性を表しています。「及びもつかない大きなこと」は直訳すると「私よりも大きいこと」、「奇しいこと」は「人の力を超えたこと」でこの語にも「私よりも」はかかります。「深入りしません」は直訳すると「行かない」「歩かない」となります。自分の分を超えたことを言わない、行なわない、それが詩人の辿り着いた生き方でした。真の謙遜とは、できないことはできないと認められるだけでなく、できることはできると言えることでもあると言われます。自分の能力の限り精一杯神と人に仕えること、できないことや分からないことはその能力を持っている人に委ねること、あるいは教えてもらうこと、それが人としての誠実な生き方と言えるでしょう。それでいて、自分にとって必要だと感じる能力や賜物は、求めて祈り努力するところに必ず結実します。

2 節

「自分のたましいを和らげ、静めました」と言われているところに、彼が以前は心騒がせることの多い人であったことが想像できます。自らを「乳離れした子」に二度も譬え、かつてはとにかく要求に応じてもらえるまで泣き叫んでいたような姿を描いています。しかし今は違う、授乳期も終わり、食事を待てるようになった。そのように、自分の祈りに対する答えがなかなか与えられなくとも、じっと時を待つことができるようになったと言っているようです。神の時を待つことは、「急いては事を仕損じる」ことから人を守ります。

3 節

忍耐を学んだ詩人は、個人の生き方だけでなく、民の生き方として忍耐深くあることを勧めています。「イスラエルよ。今よりとこしえまで主を待て」と。「今よりとこしえまで」とは、気の遠くなるような忍耐にも聞こえますが、とこしえまでも希望を持って主に頼り続けることができるというのが彼の本旨でしょう。私たちも地上にある限り多くの忍耐が必要とされますが、慌てて愚かな行動を取らず、冷静沈着に物事を見極めていけるように、何歳になっても主の助けを求め続けたいと思います。

それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。（ローマ人5:3-4／口語訳）